

「越後鉄道唱歌」の旅

——“日本版オイル・マネー” 観光・鉄道資本家の夢の跡を巡って——

小 川 功

A Journey along with “the Echigo-Railway-Song”

around Historic Ruins and Industrial Monuments built
by the Japanese “Oil Money” Capitalists in the Echigo regions

Isao OGAWA

要 旨：旧私鉄時代の面影を色濃く残す JR 越後線（旧越後鉄道）に沿って、名勝を唄い込んだ越後鉄道唱歌や沿線案内を手掛かりに弥彦公園、吉田町今井銀行建物、旧長岡鉄道寺泊駅・共楽園、柏崎八坂鉱泉、鯨波蒼海ホテル等沿線の産業・観光遺産を探索した。同鉄道の悲劇の経営者・久須美東馬を偲ぶ縁は残っていた反面、旅館等の大半は夏草が繁る夢の跡であった。これらの多くは明治期石油ブーム等に起因する富が生み出したものであるが、幸いにも同じ石油の富に依る小竹コレクションの絵はがきの画像で“日本版オイル・マネー”盛んなりし往時を偲ぶことができた。

I. はじめに

鉄道沿線の主要な施設・景観等を史料上で探るの「過去の旅行」と、現在に残る産業遺産・観光遺産を現地に訪ねる「現在の旅行」の重ね合わせた「こだわり旅」を今回越後鉄道（現 JR 越後線）にそって、「越後鉄道唱歌の旅」と題して実践してみた。今回出張する機会を与えられた新潟県下に数多く存在した私鉄が全滅した現在、旧私鉄時代の面影を偲ぶことが出来る数少ない JR 線がこの越後線だからである。そこで旅の目的地とした施設・景観は主に「越後鉄道唱歌」に唄い込まれた、あるいは越後鉄道の沿線案内¹⁾に紹介された地域から選択した。過去と、現在の間、筆者自身が約40年前に越後交通寺泊線（廃線前）沿線を旅した際の記録と記憶を織り交ぜ、時間軸と緯度・経度の交差する「旅」を仮に「紀行論文」と名付けて試行するものである。史料上で過去を忠実に再現する「歴史学」的接近と、現地・現場を重視する「観光学」的接近を学際的に上手く併用できれば…と今回初めて試みた。両者をつなぐ絆が経営者の足跡と現代に残る遺産（廃墟をも含む）であろう。新潟県は全国的にも地主・資産家等を多く輩出した富裕地域の一つであり、大地主・石油成金・女性頭取等筆者の興味を惹く人物も少なくない。

実際の訪問先は上記地主・資産家等の人物に縁のある私設遊園地、温泉、宿泊施設、駅舎、保存建物など以下の数か所である。

- ①越後鉄道直営「弥彦公園」と久須美東馬銅像
- ②吉田町（現燕市）の今井銀行建物と女性頭取・今井フユ
- ③長岡鉄道重役陣の佐渡への野望の拠点・寺泊駅と直営温泉浴場共楽園
- ④柏崎八坂鉱泉（岩戸屋別館）と鯨波温泉蒼海ホテル

本稿では越後関係文献、新聞雑誌、会社録等は略号²⁾を使用して、本文中に示した。とくにソフィアセンター（柏崎市立図書館）による「柏崎の水」シリーズ（『ソフィアだより』連載）は柏崎地方の諸温泉・鉱泉の先行研究として貴重なものであり、同じく同館所蔵の「小竹コレクション」画像ともども本稿で大いに参照・活用させていただいた。種々御教示いただいた同館サービス係の小林俊夫氏に深謝する。

II. 越後鉄道直営「弥彦公園」と久須美東馬銅像



写真-1 越後鉄道「本社並白山停車場」ほか
 (『越後鉄道沿線名所図絵』、筆者所蔵)



写真-2 「(新潟名勝)越後鉄道白山停車場構内 Niigata Meisyo」
 (『小竹コレクション』柏崎市立図書館蔵)

新潟駅前のホテルに宿泊し、越後線の早朝の通勤電車に乗り込んで、新潟を出発すれば、次の駅が「越後鉄道唱歌」の一番に「汽笛一声我汽車は、はや白山を離れたり」(越後、p1)と唄われた新潟市白山浦一丁目に位置する大正2年5月刊行の『越後鉄道沿革』の巻頭口絵に掲げられた当時の終着駅・白山停車場である。近年「老朽化が甚だしく、遂に解体され」³⁾た旧駅舎のすぐ右手には越後鉄道事務所も置かれていた。ほぼ同様な構造の二条駅(旧京都鉄道本社)がJR西日本の手で移築され、梅小路蒸気機関車館という名で産業遺産として立派に再生された例を見ると、新潟県史に関わられた瀬古龍雄氏が解体を悔やまれるのもよく理解出来る。幸いにも越後鉄道時代の創建時そのままの姿をとどめている貴重な産業遺産が、〈写真-3〉の弥彦駅である。弥彦神社を模したような朱塗りの駅舎の創建当時の様子を撮影した絵葉書は「白土コレクション」として著名な白土貞夫氏の著書に収録されている。



写真-3 「弥彦駅」の現状(平成23年8月22日筆者撮影)



写真-4 越後鉄道「弥彦公園」
 (『越後鉄道沿線名所図絵』部分)

「越後鉄道唱歌」に弥彦「駅舎の前の公園は、越鉄会社の施設にて。秋の紅葉や春の花、数寄を集めて五万坪」(越

後、p3)と唄われているのが、本稿で最初に取り上げる観光施設・越後鉄道直営「弥彦公園」である。

三島郡小島谷の素封家・大地主である久須美秀三郎、東馬父子は北越鉄道や越後鉄道の経営に参画し、新潟県に鉄道網を残したが、最後には家産を傾け、敗残の余生を余儀無くされた悲劇の経営者でもある。まず実父の久須美秀三郎は「北越鉄道、日本石油、長岡銀行等の創立に参画」衆議院議員、新潟県多額納税者（衆、p6）で、発起人総代となった越後鉄道の7,620株を保有する第3位の大株主であった。（要 T11、p15）秀三郎の四女・トミが嫁したのは『越後鉄道沿線名所図絵』、『越後鉄道 訂正七版』などの編者・長郷有泰で、彼は官吏を辞して岳父の越後鉄道に入社、経理課長（人、ちp9）、営業部長等を歴任する幹部職員であった。



写真－5 久須美東馬氏銅像
（昭和34年建碑 平成23年8月22日筆者撮影）

久須美東馬は明治10年11月6日久須美秀三郎の長男に生れ、伯爵酒井忠良再従姉であり、安田善次郎の長男・善之助の妻銚子の実妹でもある名家の鉦子（安田、p397）と結婚、昭和3年1月秀三郎の死亡により家督相続した。明治32年東京専門学校（現早稲田大学）政治科卒、明治43年9月20日越後鉄道の創立では中核的役割を果し創立委員就任（沿革、p4～）、44年3月10日越後鉄道常務（秀三郎が社長）、妻の姻戚関係から安田側が大口出資し、安田善三郎が取締役に加わった。発起人総代の「久須美秀三郎が軌道設計を質素とする案に対し、〈安田〉善次郎は本〈越後〉鉄道の有利性を認めて積極的態度を持して譲らず、両者激論となった」（安田、p397）という。主唱者である地元の名望家・久須美家を差し置いて物を申すなど、鉄道業に対する安田善次郎の並々ならぬ積極性が窺えて興味深い。大正4年衆議院議員に当選（6年再選）、5年新潟新報に参画、11年時点では北海拓殖（資）代表社員、寺泊銀行頭取、新潟合同貯蓄銀行取締役、越後鉄道常務、新潟水力電気取締役、3,840株を保有する越後鉄道の第4位の大株主（要 T11、p15）、12年11月民政系の新潟新聞社社長に就任した。その他北越鉄道、日本石油取締役、長岡銀行取締役、寺泊銀行、越後鉄道社長、新潟鉄工所監査役、新潟県農工銀行監査役、大北炭砒賛成人一覽（大正8年9月）、日英醸造（社長）3,426株、新潟鉄工所200株などを所有した。

しかし「越後鉄道の創立に参与し、常務取締役に挙げられ、又寺泊銀行に入り、頭取となり、その他数種の事業に関与したるも、昭和四年所謂越鉄疑獄事件を惹起し、業界を退く」（衆、p6）とされたように、昭和3年10月4日「七千円ノ為替手形ノ不渡ト為ルニ至リ…越後鉄道清算事務進行中百五十三万円費途不明ノモノアルコトヲ発見」（日銀、p84）、「著シク世人ノ疑惑ヲ招クニ至リ」（日銀、p84）、越鉄疑獄事件に発展した。これは2年の井上鉄相による越後鉄道、水戸鉄道など5私鉄の買収が背景だが、久須美は買収・清算の過程で巨額の社金流用が発覚し間もなく失脚した。『安田保善社とその関係事業史』は「当〈越後鉄道会〉社は全通後、順調な業績のうちに推移し…昭和二年一

○月一日に国有鉄道として買収されて解散」(安田、p397)と淡々と記すが、実際にはそんな順調な経過ではなかった。大正末期に安田の支援で総額400万円の社債を発行するなど経営状態が悪化した越鉄は株主や社外重役たる大地主から攻撃を受け、久須美社長は「株主ノ配当不足ニ対スル不満ヨリ遂ニ…告訴セラルルニ至」(日銀、p78)ったといわれる。その原因は彼が被災した日英醸造の再建に「入って社長となり整理を断行し局面の展開を図ったけれど、思はしく行かず」⁽⁴⁾、久須美に嫌疑がかかった越鉄の「費途不明ノ百五十三万円ハ結果ヨリ見レハ日英醸造ヘノ貸出ニ使ハレ」(日銀、p87)たと臆測され、「カスケードビールその他に手を出して失敗し会社の基礎を揺がしたので株は下る。人気は去る、といふ有様で…結局、政府に買収して貰ふより外に手がなかつたので、姻戚関係にある安田家に頼み込み、その助力を借りて買収して貰うた…久須美家は越後の名門、由緒ある門閥なのに東馬氏の余りにお坊ちゃん式のやり方の爲めに滅茶々々になつて了つた」⁽⁵⁾と鉄道記者清水啓次郎から酷評されている。

昭和2年4月「白山新発田間ノ予定追加ト共ニーノ海岸幹線ヲ完成」⁽⁶⁾させる目的での越後鉄道買収案が時の議会上程されるのに先立ち、「越後鉄道国有運動費トシテ要路々々へ振り撒カレ」(日銀、p86)、時の政友本党幹事長小橋一太(浜口内閣の文相)はその運動謝礼金として、鉄道政務次官佐竹三吾(貴族院議員)の手を通じて、同社社長久須美東馬から三万円を收受したとの嫌疑をかけられ、「久須美東馬と小橋との金銭授受は東京駅頭に於て直接行はれた」⁽⁷⁾とされたる収賄容疑で訴追されるなど「鉄道疑獄の渦中に巻き込まれ」(S5. 2. 1D)、昭和6年7月8日の控訴審の古山検事の論告により、東馬は別に背任罪として懲役1年6月が求刑された。(S6. 7. 9 東日)安藤弁護士は「本件は二三の小説家が集ってデッチ上げた創作物である…二万円の点(約束罪)は会社解散後であるから無罪」(S6. 7. 11 東日)と東馬を弁護した。結局東馬は経営していたビール事業等の失敗、越後鉄道買収工作での逮捕等の悲劇が重なり、「越後鉄道清算人等主ナル公職ヲ辞シ爾來専ラ謹慎」(日銀、p87)したもの、ついに家産を傾け、敗残の余生を余儀無くされた。晩年に地元市長が彼を慰めに訪問すると「往時を追想感極って」(遺徳、p180)泣き出した程だという。昭和22年10月22日死亡した。

島田村小島谷の名家に生まれた彼は庭園にも造詣が深かった。『越後鉄道案内』には「三島郡小島谷の素封家久須美家の庭園を佳雲園と号す。小島谷駅の東方僅々三四町にあり、清雅にして、又雄渾、県下稀れに見るの名園なり」(案内)と紹介する庭園は「享保年中の築造で、其後維新の兵燹に罹ったが、近年大いに修補して益々名園たるに至った」(図絵)のは東馬も生家の名園の復興に尽力したものであろう。庭園趣味の東馬は「鉄道事業の負うべき責務…新潟県における文明の尺度を作る微意」(遺徳、p89)から重役の反対を押切り「設計は全部自身で計画庭石植木の買出しまで自分でやり」(遺徳、p180)5.5万坪もの和洋折衷の弥彦公園を築造し、いづれ動・植物園、博物館等の増設も予定していた。大正10年に「久須美東馬先醒の尊命を拝して…越後鉄道沿線の名所図絵を作」(図絵)った吉田初三郎画伯は「これは本会社の設計に成るもので、駅前からすぐに園内に遊ぶことが出来る。中央松霞山を挟んで御榊山と御殿山とを包括した五万余坪の全体がそれで、其広潤なる点のみに於ても全国多く例を見ない…唯だ漸く大正六年から十年計画で築設に着手したもので、今は其工事進行中だけに、密樹茂林の趣は浅いが、工全く成って歳月を経たなら更に幽邃の姿を加へて、全国屈指の大公園として、イカニ此神境に一層の美を添えるであらうか」(図絵)と予測した。彼自身も大正12年には「曩には弥彦支線開通と共に、ここに一大遊園地を築設することを計画し、今やその工殆ど成り、三条支線亦昨年一部の開通を見、さらに進んで八木の景勝を有する下田延長線、布設の準備着々進行中に属す、開通を見る蓋し遐きにあらざるべし」(越後、序)と意気軒昂であった。しかし遊園地への投下資本が531,889円にも達した「弥彦公園ハ前内閣当時三十三万余円ニテ政府買上ニ内定シタル由ナレトモ内閣更迭ニテ未タ正式ノ決定ヲ見ルニ至ラス」(日銀、p79)、結局越鉄の国有化時に公園は除外され、困った清算人は処分に奔走、結局不動産業者が買収・寸断して分譲することになった。そこで名園の廃絶を惜しむ地元の努力で公園として存続することになった。かくして久須美家は没落したが、鉄道と県下最大の公園が立派に残ったものといえよう。

Ⅲ. 大正期の町並みが残る吉田と今井銀行女性頭取・今井フユ



写真－6 「(吉田名所)市街(伊藤写真館撮影)」
(「小竹コレクション」柏崎市立図書館蔵)



写真－7 旧今井銀行店舗
(平成23年8月22日筆者撮影)

「越後鉄道唱歌」に「和納も過ぎて西吉田、二ツの支線の分岐点。東に行けば燕駅、三条町に程近し」(越後、p2)と唄われているのが越後鉄道分岐点の西吉田(現吉田)である。大正7年の『越後鉄道案内』には「吉田村…弥彦に到る支線の分岐点にして、燕、三条方面に到る要衝の地なり。殊に米穀の集散地として毎年益々発展す」(案内)として市街地の写真を掲げるが、現在の姿とほとんど変わらない点が素晴らしい。より鮮明な絵葉書を〈写真－6〉に示した。昭和2年発行の「西吉田市街略図」(町史、p260所収)によれば、下町通りに面して広大な今井本家があり、その北東の隅に今井銀行が立地していた。『越後鉄道』には「今井家の天満宮」の項に「吉田村の豪家今井家に八幡の私祠あり。毎年五月二十五日例祭を執行す。俗に草花祭といひ、遠近の植木商数百名来集して、花卉盆栽を鬻ぎ、観覧者群集す」(越後、p28)とある。県道石瀬・吉田線にそった古い街並みを進むと、県道から奥まった所に今も「吉田天満宮」が鎮座する。宮前には「天神様の祭主今井家の祖は近江の国に発し…(中略)…吉田郷へ移り住んだ。今井家の当主は、永年、毎月岩室天神山の天満宮にお参りする慣例になっていたが、約二百年位以前…今井家の守護神として屋敷内にお祭りすることになった」と私祠であった詳しい由来が掲げられている。参道を県道へ戻った正面に今も〈写真－7〉の通り旧今井銀行店舗が貴重な金融史遺産として立派に現存している。

合資会社今井銀行は明治33年2月24日新潟県西蒲原郡吉田村(現燕市)大字吉田に資本金5万円で設立され、33年7月5日開業(北銀、p411)、今井銀行株式会社は大正5年7月合資会社今井銀行の債権債務を継承し資本金50万円で設立された。(北銀、p413)新潟県には強力な大地主多数が存在し、その多くは銀行経営に関与し個人銀行も少なくなかったが、昭和期まで「地主の〈個人の姓〉名を冠した銀行は今井銀行のみ」(町史、p290)という典型的な地主銀行であった。現当主の今井典子さんから直接に伺ったお話によれば、今井フユ(新潟県西蒲原郡吉田町)は明治13年11月「新潟県下有数の大地主」⁽⁸⁾今井孫市と妻ミネノの一人娘に生まれ、明治39年10月合資会社今井銀行有限責任社員となり(北銀、p412)、大正7年11月23日父孫市が死亡すると、ほかには子供がいなかったため今井家の財産・家長の地位・銀行の役職等の一切を家督相続した。合資会社今井銀行では明治33年2月同行の設立時に今井宗家の分家・今井タケが有限責任社員となって1,000円を出資した先例があり、女性が経営に関与できる風土が存在したと考えられる。戦前期の銀行において女性頭取は全国的にも極めて珍しいものと思われる。

大正11年時点では共済生命、安田保善社、久須美秀三郎・東馬父子について3,142株を保有する越後鉄道の第5位の大株主であった。(要 T11、p15)父孫市が越後鉄道の発起人・創立委員・初代取締役(沿革、p4～)を務めた創業集団の有力メンバーであったことに由来する。昭和3年度の所得税額23,397円は県下第9位、所得地価289,324円の、今井フユは新潟県を二分していた斎藤・白勢の二大地主勢力のいずれにも組せず、中立的な位置にあったと判断(日銀、p39)されているが、末期の越後鉄道で大地主の株主から経営不振の責任を厳しく糾された前述の久須美東馬と、沿線の銀行家・大地主で社外大株主の今井フユがどういう立場で対峙したのかは甚だ興味深く、今後の課題としたい。

IV. 長岡鉄道直営の温泉場「共楽園」



写真-8 「大河津分水工事」絵葉書（筆者所蔵）



写真-9 JR 越後線・現「寺泊駅」
（平成23年8月23日筆者撮影）



写真-10 越後交通・元「寺泊駅」跡
（昭和47年4月筆者撮影）



写真-11 越後交通・前「寺泊駅」
（昭和47年4月筆者撮影）

現在の分水駅に近づくと「越後鉄道唱歌」に「行けば程なく何ひびく、信濃の川の分水路。一千余万を投ずてふ、北陸一の大工事」（越後、p4）と唄われた分水路が見えてくる。大正7年の『越後鉄道案内』にも「大河津分水工事」の写真掲げ、「二里二十町の水路を掘鑿するものにして、工費予算一千万円、掘鑿土量五百余万坪、明治四十年の起工に係り…数十の土工用機関車、鑿岩機、数千の土運車西に東に運転して壯観目を驚かす」（案内）と名勝として詳述する。戦前期には〈写真-8〉のような分水工事の絵葉書も多数発行されており、沿線の産業観光の目玉であったことがわかる。越後鉄道が国有化された直後の昭和3年ころの小冊子『信濃川補修工事概要』によれば、「信濃川改修工事は…明治40年度乃至昭和2年度、21箇年継続工事として総工費約23,539,730円を支出」⁽⁹⁾し続けるエンドレスの大工事であり、なお多数の見学者のあったことが判明する。

「越後鉄道唱歌」に「鉄橋踰れば大河津、長鉄線路の交差点。左は長岡來迎寺、右にし行けば寺泊」（越後、p4）と唄われた長鉄（長岡鉄道）分岐駅の大河津駅（開通時は寺泊駅）が〈写真-9〉のJR 越後線の現寺泊駅である。大正4年10月長鉄が開通し、〈写真-10〉の終着駅が「寺泊駅」になったことから越鉄寺泊駅は「大河津駅」に改称した。（寺泊、p273）昭和36年8月の水害で休止となった越後交通寺泊～寺泊新道間が昭和41年廃止され、寺泊新道が〈写真-11〉の「寺泊駅」となった。さらにこの寺泊～大河津間ほかが昭和48年4月15日廃止され、昭和61年11月大河津駅が結局開通時の駅名の「寺泊駅」に戻るといった複雑な経緯になっている。したがって、新旧四つの「寺泊駅」（駅数は三つ）が存在したことになる。

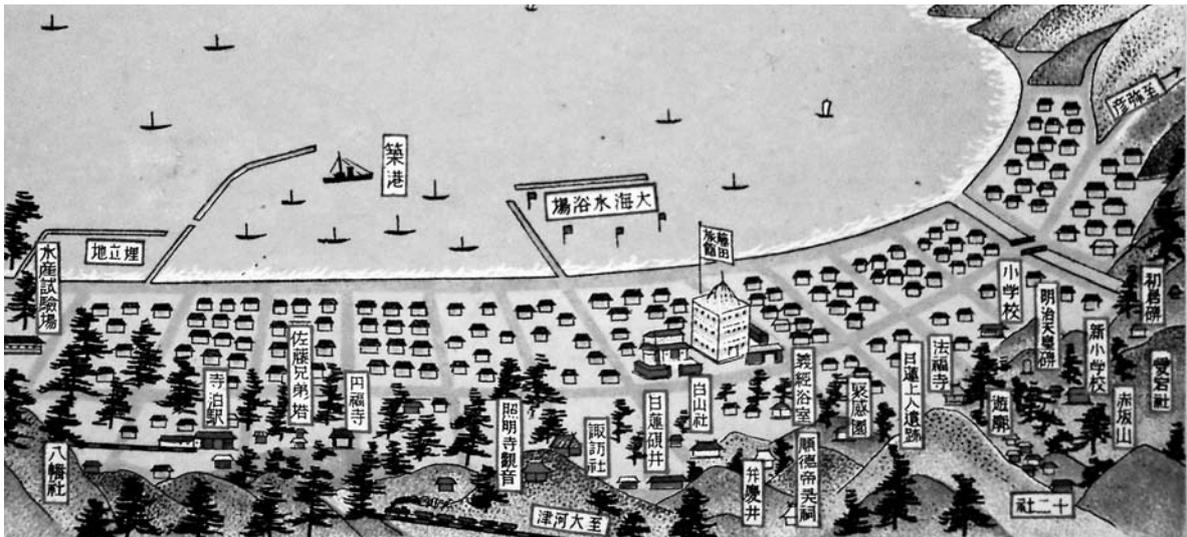


写真-12 「寺泊案内 世界ノ寺泊藤田旅館 電話長二十一番」
 (部分 「小竹コレクション」 柏崎市立図書館蔵)

寺泊市街の中心に位置する長鉄「寺泊駅」は観光地の終点にとどまらず、佐渡への観光輸送の玄関口、さらには臨港鉄道・埋立・佐渡横断鉄道敷設の大構想の出発点でもあった。〈写真-12〉に「埋立地」とあるのは大正12年8月発行の『越後鉄道』に寺泊は「平地極めて狭きが故…殆ど家屋を建つるの余地無く…一会社組織せられ、海岸の埋立中なり」(越後、p82)との詳しい記述がある。大正5年1月寺泊―西長岡間を開業したばかりの長鉄渡辺社長以下7名の役員が大正5年寺泊海岸の埋立を許可され、終点の「寺泊駅から寺泊港内まで敷設延長して駅を作り、最短距離である佐渡の赤泊へ旅客を運ぼうという構想」(越交、p163)であった。大正6年渡辺六松(長岡市表町)などの長鉄役員らは資本金30万円で寺泊海陸運輸を設立した。さらに長鉄は大正15年対岸である佐渡の両津町～河原田間13哩70鎖の免許も得て、「長鉄、海を越えて佐渡に鉄道敷設」¹⁰⁾と地元紙に大きく報じられた。

こうした一連の野望の中心人物は中越の財閥・山口家・六十九銀行を背景とした社長の渡辺六松と思われる。渡辺六松は石油・製糸業者、弘化2年7月10日生まれ、先代の養子となり、まず織物商・大清商店を営み(日韓下、p19)、明治24年岸宇吉らと長岡製紙場を開業、後に石油・製糸業に注力した。40年北越製紙設立時に相談役就任、大正3年新群鉄道発起人、長鉄社長、大清商店製糸部・長岡製糸場長、新日本石油、寺泊海陸運輸(六十九銀行貸出先)各取締役、宝田石油の代理店・國油共同販売所監査役等を兼ねた。(人、w p20)資産は130万円(有価証券90万円、不動産その他40万円)¹¹⁾で、昭和9年時点で長鉄8,983株の筆頭株主(株投、p430)であり、かれらの背後には「北越実業界の重鎮」¹²⁾で六松と姻戚関係ある渡辺藤吉(鉱業、栃尾鉄道社長、國油共同販売所会長ほか多数)、川上佐太郎(米穀卸商・川佐商店)、中野財閥の中野信吾¹³⁾など長岡財界の有力資本家も取締役に加わっていた。当時石油産業の興隆に支えられていた長岡・北越地区のベンチャー精神の発露であったと考えられる。

寺泊温泉「共楽園」

『越後鉄道 訂正七版』は発行直前に発見された温泉には言及していないが、寺泊温泉は「日本石油株式会社が大正十一年七月、石油試掘の際発見したもの」¹⁴⁾である。まず明治23年に有限責任日本石油会社(現在の日本石油)が寺泊町の尼瀬で、綱掘り式の機械掘削を開始した。年友鉱泉とも呼ばれる寺泊「温泉は始め大正九年に石油の試掘をなし」¹⁵⁾、続いて掘鑿しつつある間に、11年5月4日宝田石油(後に日本石油と統合)会社が年友地内で石油井を試掘した際、深度約2,700尺から30度のアルカリ性食塩泉温泉が噴出¹⁶⁾したため、油田として見込みがないとして廃坑とした。これを知った長鉄が温泉場として利用することを計画した。社長の渡辺をはじめ、長鉄役員陣には石油業界に通暁した資本家が多く、当然に事情通として大胆な判断も可能であったのであろう。1日の湧出量300石、温度は摂氏30度の冷泉であったが、同時に3,000立方尺もの「天然瓦斯が盛んに噴出してゐるから、併せて之を浴場に導き、

之を以て加熱して浴用に供する」¹⁷⁾ことで、燃費負担の重い温泉場経営の採算性を高めると見込んだのであった。



写真-13 「(寺泊名所) 温泉共楽園 裏面 NIIGATA AOKI PRINTING CO.
(「小竹コレクション」 柏崎市立図書館蔵)

13年10月新潟県長岡病院付属分析所、14年9月新潟県警察部衛生課の分析の結果、アルカリ性食塩泉で貧血、慢性胃病等に効能があることを確かめた。13年10月29日鉄道大臣より「遊園地浴場経営並土地建物賃借業兼営ノ件」(越交、p301)の許可を得、14年9月8日新潟県知事より温泉浴場共楽園開設の許可を得た。開業を前に渡辺社長ら各役員が家族を伴って試浴を行なった上で、15年4月16日寺泊温泉共楽園を開業した。同年6月16日新潟県私設鉄道協会の総会を新設の共楽園で開催し、県内の同業各社にもお披露目を行なった。続いて温泉案内や絵はがきを株主、長岡の有力者に発送し「不老長寿之霊泉」だと宣伝に努めた。同年12月2日旅館業に加えて、自動車業兼営の許可も得た。(越交、p301)

同年12月21日旅館業に加えて、料理屋業兼営の許可も得て、料理屋としての客室を増築し、その後娯楽室、大広間、客室等を次々新增築した。こうして共楽園は「客の待遇も鉄道料金式とよぶ定額料金とし、夫婦風呂などの工夫もこらしたので、中越地方唯一の温泉として多くの湯治客が訪れ」(寺泊、p298)、年々増加する共楽園の湯治客輸送は長鉄のドル箱となった。そこで、寺泊終点と寺泊海水浴場の間に昭和3年7月25日新駅「寺泊温泉停車場」を目の前に設置し湯治客の便宜をはかった。共楽園では貸自動車も開業して送迎客の輸送を行なったが、4年7月25日貸自動車が西長岡発の最終列車と衝突する不幸な事故も起こった。

5年には「長岡鉄道と寺泊温泉共楽園」というパンフレットも作成した。「寺泊温泉共楽園海水浴場 瀟洒な浴場 旅館料理屋娯楽機関 共楽園 室数一三 総畳数一二六 宿泊料一円五十銭以上三元。同分館(みどり館) 室数一二 総畳数八〇 宿泊料同上、自炊制度畳一枚に付十五銭、蒲団料七銭以上三十銭、飯料十銭」¹⁸⁾

長鉄と連絡する寺泊～小木間の佐渡連絡船を経営する越佐商船(資本金10万円、払込2.5万円)では「共楽園を度々使用し、役員会および打ち合わせ会議が開催された」(越交、p163)が、長鉄と4名もの共通役員を有する身内企業の当然の定期的利用であった。新潟県の主導で設立された第三セクターたる佐渡汽船に昭和7年越佐商船等が順次統合され、これ以降長鉄は佐渡汽船に400株を出資する関係にとどまった。(株投、p430)

また近隣の信濃川補修事務所員なども当然に共楽園の常連となった。峯崎淳「日本の土木を歩く 大河津分水」によれば、内務省の直轄工事によって大正11年8月完成した「東洋一」の大河津自在堰が僅か5年後の昭和2年6月24日8連のうち3連が陥没したため、内務省の威信は地に落ちた。責任を追及され苦しい立場の内務省技師宮本武之輔が地蔵堂の事務所にあつて悶々と復旧工事設計に従事する当時の彼の日記には共楽園の頻繁な利用¹⁹⁾が記載されている。彼らのように中央から越後に単身赴任した淋しい連中にとって、共楽園の頻繁な利用は文字通り一時の楽園への逃避であったかと推測される。

昭和8年ころ戦前黄金期の共楽園の設備は遊園地、運動場、見晴台、撞球、卓球、ブランコ、滑り台、ラジオ等を備えて総延坪は130坪にまで拡張され（新泉、p172）、浴場旅館の投資額は20.8万円にも達した。しかしその反面で一連の積極投資が裏目に出たためか、このころの長鉄は多額の借入金を抱えて金利負担にあえぎ、「最近欠損続きしたため右優先株の配当もなさず」（株投、p430）という苦境に陥っていた。

11年11月発行の『新潟県温泉協会 会報』所収の会員名簿に「寺泊温泉 三島郡寺泊町大字寺泊 旅館共楽園 小秋元三八吉」（会報、pp150）として小秋元専務の名が代表者として収録されている。11年11月発行の小冊子には長鉄寺泊「駅付近には土類含有アルカリ性食塩泉の寺泊鉱泉があり、慢性リウマチス、半身不随、婦人病等に効があるといふ。〔旅館〕共楽園（温泉）、藤田屋、住吉屋、みのや本支店、一泊二円乃至三円」²⁰⁾とあった。おなじの小冊子の昭和16年1月四版にも同文があり、料金部分のみ「一泊二円半-六円」²¹⁾に改訂されている。

16年発行の『日本温泉大観』には寺泊鉱泉は新潟県三島郡寺泊町、長鉄寺泊駅下車、旅館共楽園、同分館があったと記載されている²²⁾。18年長鉄の収益源であった共楽園も戦時下の国策にそって大日本医療団へ譲渡することを余儀なくされ、11月19日廃業した。（越交、p304）共楽園の建物は同団新潟支部寺泊奨健寮に転用され、虚弱青年の療養養成施設として国民の体位向上に貢献したという。（越交、p165）現地を訪れても公共福祉施設がその跡地に建っていると聞かされただけで、本体の越後交通（旧長鉄）の線路そのものも廃止され、約70年もの歳月は「共楽園」の名残を無残に消し去っていた。しかし当地の温泉ニーズは消えるはずもなく、現在では別の複数の鉱泉宿が近傍で多くの客を集めているのは皮肉である。

V. 名建築家タウトの宿泊した柏崎「八坂鉱泉・岩戸屋支店」

「越後鉄道唱歌」に「西中通、比角駅、過ぎて停まる終点は。入江につづく白波の、尾花が里の柏崎」（越後、p6）と唄われているのが越後鉄道終点柏崎である。現在駅前ホテルが建つ目抜きの一等地にかつて存在した駅前旅館の岩戸屋（旧支店）は大町にあった旧本店が寛保年間の創業というから300年近い老舗であった。「本店は柏崎大町にあり、北（越）鉄（道）開通と共に支店を停車場に開」（実業、p52）き、「本支店間私設電話の架設あり、球戯場の設けありて、内外顧客の利を計ると、尚油田地製油所を視察さる方へは悉く案内」（実業、p52）するを旨としていた。岩戸屋七代目平左衛門の末娘タイに面会した映画評論家の荻昌弘氏は「この店が現在地に建ったのは、明治三十年、信越線開通の時である。各宮家も宿泊され、森鷗外が日記に記載してくれたり、ブルーノ・タウトが著者のなかで建築を讚美したことなどが、非常な誇りとなってきた」²³⁾と書いている。

明治15年3月軍医として徴兵検査立合に新潟へ出張した鷗外は「九日…青海川を過ぎて柏崎大町なる岩戸屋に宿りぬ。街に出て、そぞろあるきするに妓女の家柱に長さ六尺ばかりなる木牌を懸けたるを見ておどろきぬ」²⁴⁾と、「北游日乗」に正確に「柏崎大町なる岩戸屋」と記している。このころの岩戸屋は木造三階建て、日本土木会社、神風講社、新潟県官御定宿の看板を揚げ²⁵⁾、鷗外の驚いたように郭・住混在の繁華街の角地に立地していた。しかし北越鉄道開通に伴い柏崎中心部の老舗「旅舎が多く…停車場付近に移転」（華街、p1）した一環として明治30年に駅前に支店を出した直後の35年の広告には「本館の特色は丁寧懇切を旨とし、殊に衛生に注意す。本支店の間に電話の架設あり。越後柏崎ステーション前 支店 岩戸屋平左衛門／全扇町 本店 岩戸屋平左衛門」（石油、巻末）とある。

「北游日乗」を研究した安川里香子氏が中野むつ子を訪問して聞きとり調査を行った結果によれば、「明治十五年に鷗外が投宿した当時大町にあった同館の位置は、現在の西本町二丁目九番十六の角地に当たり」²⁶⁾、これとは別に「タウトの投宿したのは海岸にあった岩戸屋別館の方である」²⁷⁾として、従来混同されがちな「大町の本店」「駅前の支店」「海岸の別館」の三者を峻別した上で「今日では柏崎の岩戸屋といえはこの支店の方が人々の記憶に残っており、大町の本店を知る人はほとんど居ない」²⁸⁾とも指摘している。理研の大河内正敏が柏崎で常宿とした岩戸屋は駅前の方であろうから、著名人の鷗外、タウト、大河内がそれぞれ愛した岩戸屋は経営者は同一でも、実は全く別々の建物ということになろう。

41年の『日韓商工人名録』では「旅人宿業、岩戸屋旅館 柏崎町 本支店間電話ノ架設アリ、所得税…、営業税…、和洋食随意、球戯場アリ」（日韓、新潟、p51）、44年の『旅館要録』には「和風二階建、客間三十四、別荘三棟、宿料六十銭、八十銭、一円、一円五十銭、二円、中食半額、柏崎駅前岩戸屋館主中野平左衛門」（要録、p91）、また大

正2年の『帝国旅館全集』にも「柏崎 柏崎停車場前 電話一二」²⁹⁾とともに駅前のみが記載されており、明治末期に駅前に集約したものと見られる。ただし44年の『信越商工便覧』では「柏崎停車場前 岩戸屋旅館／柏崎大町 岩戸屋別邸／東京神田区平永町 岩戸屋旅館³⁰⁾」(商工、p76)、45年2月の『上野新潟全線各駅旅の友』では「越後柏崎停車場前 御旅館 岩戸屋 電話本邸 長一二番。別邸 二五番。家具整頓親切丁寧に御取扱可仕、玉突場設備も有之候」(旅友、p161)となお本邸・別邸が併存している。

小竹コレクションにも駅前の「岩戸屋旅館 阿部楼³¹⁾」絵葉書が収録されている。大正15年の『全国旅館名簿』には「岩戸屋 中野平左衛門 柏崎 電話 長一二、柏崎駅前」(名簿ク、p14)、昭和5年版の旅館名鑑に「岩戸屋(中野平左衛門) 柏崎 電話一一、一二、柏崎駅前(名鑑、p192)、14年発行の『旅程と費用概算』には柏崎町の旅館として「天京³²⁾、新道尾、岩戸屋、天屋。一泊三円位」³³⁾



写真-14 絵葉書「(柏崎名勝) 八坂神社ノ遠望」(筆者所蔵)

一方、〈写真-14〉の八坂神社は柏崎駅から「西北十町」離れた柏崎町本町一丁目にあり(越後、p125)、「明治五年柏崎町諸社を合して柏崎神社、石井神社、八坂神社の三となす。八坂神社は普通祇園と称し、七月七日より十四日迄祭典を挙行し煙火を打揚げ、頗る賑かなり」(案内、p126~7)と紹介されている。現在のぎおん柏崎まつりは八坂神社の大祭「祇園祭」が発祥とされる。明治42年の記述では「境内広く、丘あり、芝生あって…其風光の明媚なる事は絵も及ばぬ位」(華街、p67)とあり、大正15年に発行された「柏崎案内」の八坂神社の項には次のような記述がある。八坂神社の「境内は眺望絶景の地で最近八坂霊泉組合を組織して広大な浴場と貸間が出来ている」とあるが、八坂神社境内の「浴場と貸間」とは昭和2年に開業した鉱泉浴場・御料理八坂館(電話六一九)である。3年7月発行の『柏崎附近名勝案内』の鳥瞰図には柏崎駅前の岩戸屋旅館、天京旅館、石井神社奥の天屋旅館、阿部楼などのほか、八坂社とネマリ地蔵の間に温泉マークを付けて「八坂館」を描いている。

当地に精通した村田徳雄氏によれば「(西本町)三丁目町内会小山会長が代表者となって八坂霊泉組合…温泉旅館として運営に当」(年表、p429)った由である。この「八坂館」の鉱泉は、かつての八坂町共同洗濯場で使われていた水と同じものであり、石油井戸を掘った際に湧き出たものという³⁴⁾。

その後岩戸屋の中野平左衛門³⁵⁾がこの鉱泉宿の八坂館を買収し、中野イトが岩戸屋旅館の別館として経営した。(年表、p428)

昭和10年5月20日ドイツの建築家ブルーノ・タウトが、岩戸屋の別館に宿泊し、日記にこう記している。「午後二時五十分の列車で新潟へ発つ。しかしこの汽車だと新潟着が夜の九時頃になるものだから、七時に柏崎で途中下車した」³⁶⁾…「柏崎では例の通り駅長に旅館を訊ねて、I別館に入る。宿は海際にあり、私達は大きな室を二つと海に向つてゐるヴェランダとを占領した。疲れてゐたので実に気持よく入浴し(少し熱かったが)、それからお伽噺にでも出

てくる様な夕餉の膳につく。…サービスは極上である。ズボンにはアイロンをかけてくれるし靴はよく磨いてある（それなのにこの旅館は随分安い）。私達は何もかも幸福であった」³⁷⁾

同じ記者による初版の「I別館」と正しく表示された旅館名が、増補改訂版では「岩戸屋」に改訂されているが、なぜか「別館」部分が省略されたため3カ所（正確には東京を含め4カ所）ある岩戸屋のいずれかが不明となった。もう一か所初版の「この旅館は随分安い」の部分が増補改訂版では省略されているので、情報量の多い初版の方を引用した。

察するに予約なしに夜遅く到着したタウトは、駅前（旧支店）が満室のため海際の別館（旧八坂館）に回された模様だが、結果的に海際にあり、鉱泉もある岩戸屋別館の低料金・高サービスに大満足したものであろうか。岩戸屋別館はその後、14年4月「石塚常栄氏の懇請で高柳出身者で柏崎で中等教育を受けている生徒達の宿舍」（年表、p428）である高柳の学生寮に転用されてしまった。15年には帝国石油青年学校、戦後は国鉄の八坂寮（アパート）に変遷した後、42年に売却解体されたという。（年表、p429）

岩戸屋による八坂館買収時期は特定できないが、タウトが宿泊する少し前に買収され、その後数年を経ずに別館は寮に転用されたから、遠来のタウトが岩戸屋経営時代にちょうど宿泊できたタイミングは奇跡的なことのように感じられる。

VI. 鯨波鉱泉「蒼海ホテル」



写真-15 「(避暑地案内) 蒼海ホテル本館の一部
(柏崎港大掛小間物店発行)」
〔小竹コレクション〕 柏崎市立図書館蔵



写真-16 「北越鯨波温泉場」
〔小竹コレクション〕 柏崎市立図書館蔵

「北越鉄道駅名の歌」には「鯨波には駐駅の跡も残りて岸辺には、形あやしき岩もあり山には茂る姫小松」（北越、p14）と唄われている。当地の海浜リゾート施設の先駆けである蒼海ホテルは明治36年9月北越鉄道線鯨波海岸に海水浴旅館として開業、39年7月ここで東郷、上村「両將軍の歓迎会が開かれ…当時柏崎の芸妓五十有余名は、揃ひの扮装で、庭園に於て、当地名物の三階節を観覧に供した」（華街、p46）という。35年ころ北越鉄道臨時駅の前でまず開業したのち、36年山の上に本館が出来たとされ³⁸⁾、一説には当時の荒浜村の豪商、牧口³⁹⁾別邸でもあったといわれる。

36年10月刊行の『北越鉄道案内』には「有志茲に見る所あり明治三十年以来年々…周囲の状況を調査…旅舎亦新に成りて能く万客に待遇す…▲料理店旅舎 蒼海ホテル、若松屋⁴⁰⁾等あり」（北越、p42）と開業草々の蒼海ホテルが記載されている。蒼海ホテルは「開業明治三十六年、和風二階建共四棟、客間三十一、宿料六十銭、八十銭、一元、一元五十銭、昼飯半額。鯨波停車場ヨリ五六十歩アルノミ」（要録、p91）と、駅からの近さを強調していた。

33年3月には先行して刈羽郡下宿村番神岬に株式会社北溟館が海水浴宿泊を目的として資本金7,000円で設立された。（日韓下、p64）取締役の後藤泰之丞（下宿村）は地主・地価409円（地価、p8）であった。35年5月の『越後の婦人』には「下宿番神の岬に有りて眺望の絶佳なる、海水浴に適當なる、構造の瀟洒なる、料理の新鮮なる」（婦人、巻末広告）と広告し、『北越鉄道案内』には「眺望極めて佳なる所へ旅店あり。北溟館是なり。客室数十通気採光共

に宜しく海水浴場及温浴場の設備あり。是を以て晴雨共に入浴することを得、浴客常に充つ」(北越、p47)と紹介されている。



写真-17 「(避暑地案内)北溟館の一部(柏崎港大掛小間物店発行)
 (「小竹コレクション」柏崎市立図書館蔵)

長岡の渋谷善作(長岡商業会議所副会頭、長岡銀行専務)など「鯨波の海は、長岡の人によって開拓され⁽⁴¹⁾、「蒼海ホテルも長岡の人によって開発が進められ⁽⁴²⁾」たが、このことを示すのが41年7月発行の『日韓商工人名録』に長岡市の旅館業野本清平の次項に「旅人宿業蒼海ホテル 北陸線鯨波駅 海水浴場 所得税…営業税…」(日韓、p28)と場所違いの長岡市に掲載されている事実である。おそらく「本県下の石油熱勃興と共に、商工業又大ひに振ひ」(旅友、p149)とされる石油ブームに湧く長岡の資本家に長岡の旅館業者なども加わって、長岡の富裕層を対象とする海浜リゾート施設として北越鉄道による鯨波への臨時停車場開設を機に企画されたものかと推測される。

明治45年2月発行の『上野新潟全線各駅旅の友』には「臨時途中下車駅 鯨波駅…当駅は避暑の好適地として人の知る処なるが…其の名大に伝はれり、遠近争ひ来りて遊ぶの士、毎年夏期毎加はるは、蓋し又上越の沿岸中、其群を抜くを知るべし…△主なる旅館▲蒼海ホテル 同館は鯨波停車場を下りて僅に一丁、松林中の丘上にあり、又別館は此処を去る四丁に過ぎず、而も平砂の上にあれば、専ら海水浴の便利を旨とし、何れも堅牢なる日本作りの構造なれば、空気の流通は敢て外面と異らず…新鮮なる魚介は調理を吟味し、旅客自らの網引も興あり、時には細流に鮎を補ふべく、稀には玉突台に輪贏を争ふも面白かるべし…宿泊料の低廉なるは又其比を見ざる程にして特別一泊は一円二十銭、上等一泊八十銭、並等一泊六十銭」(旅友、p148)と詳しく紹介されている。大正3年7月の『新潟県羽羽郡地価持一覽』にも「蒼海ホテルの海水浴場」「蒼海ホテルの涼亭」の写真二葉とともに「北海の絶勝地 御旅館 御料理 海水浴場 信越線鯨波駅 蒼海ホテル 電話二百十三番」(地価、巻末広告、頁付なし)の広告を出している。

また大正4年の鉄道院発行の『鉄道旅行案内』には柏崎駅の天京、岩戸屋とともに「鯨波駅蒼海ホテル(鯨波)」が掲載されている。大正5年7月25日作詞家萩原朔太郎が避暑で宿泊、『月に吠える』に収録された「赤松の林をこえて、くらきおほなみはとほく光ってゐた、このさびしき越後の海岸、しばしはなにを祈るころぞ、ひとり夕餉をはりて、海水旅館の居間に灯を点ず。くぢら浪海岸にて⁽⁴³⁾」との詩「海水旅館」を書き、蒼海ホテル宿泊中の萩原朔太郎に宛て友人の室生犀星も書簡を出すなど、文壇との因縁も深い。「小竹コレクション」にも「鯨波村 海水浴 蒼海ホテル 八枚」の絵葉書が収集され「鯨波村 鉦泉割烹蒼海ホテル 八」(「小竹コレクション」第二回目収集原簿『名所絵葉書及名蹟物産総覧』、柏崎ふるさと人物館の常設展示)と記入されている。

7年蒼海ホテルは柏崎閻魔前の有力料亭「儀右衛門茶屋」経営者の山岸儀右衛門により買収された⁽⁴⁴⁾。この山岸の経営する「右米左姫楼」は「酒類鮮魚御料理」(商工、p77)、「有名な柏崎の閻魔堂前に在って、鏡沖の眺望宜しく、料理の外に蕎麦もあって」(華街、p2)、「会席御料理、酒類仲買商、柏露酒特約販売、麺類いろいろ」(婦人、巻末

広告)、柏崎町会議員、地主、地価527円(地価、p3)、営業国税納税者(地価、付録p1)であった。

12年の『越後鉄道』には柏崎町の旅館として「蒼海ホテル(鯨波)」(越後、p125)を挙げ、「鯨波の海水浴場」の項でも「鯨波は米山峠往時の宿場なり。付近山水の勝に富み、又海浜は浴するに適す。故に夏時避暑客甚だ多し」(越後、p133)とするが、まだ鉱泉には言及していない。

鯨波鉱泉は刈羽郡鯨波村の信越線「鯨波駅のすぐ後、海岸の小丘にある鉱泉場で…鉱泉は大正十二年の開湯で、一名霊夢泉と名づけてゐる。…泉質 殆んど無色澄明無臭で味は鹹く、弱アルカリ性」(新泉、p224)であった。鉱泉を開発したのは鯨波鉱泉唯一の旅館・蒼海ホテル(内湯)の新しい経営者の山岸儀右衛門であった。蒼海ホテルは「客室の総延坪四〇〇坪である。ピンポン、ブランコ、ラジオ等の設備がある。飲料水、簡易水道があり、水質は良好である」(新泉、p229)とされた。

昭和3年7月発行の『柏崎附近名勝案内』には「鯨波は…近来関東関西方面の都人士にして暑を此処に避くるもの激増し、鯨波駅前高丘の松林中なる鉱泉旅館蒼海ホテルは設備の完全、待遇の懇切を以て好評あり」⁴⁵⁾とあり、鳥瞰図には鯨波駅前に「ホテル別館」、御野立公園の横に「鉱泉浴場」、「蒼海ホテル」が描かれている。経営者は「山岸儀右衛門、電話柏崎二一三」(名簿、クp14、名鑑、p292)で、3年8月には一統の山岸儀一郎が御野立公園の隣接地を寄付している⁴⁶⁾。宿泊延人員は昭和4年3,496、5年572、6年3,899、「宿泊客以外の湯銭一回五銭」(新泉、p230)を徴収する日帰り推定延人員は1,200人で、「海水浴場としても北陸有数の」(新泉、p224) 鯨波海水浴場の前に立地するため「浴客は冬期が最も少ない」(新泉、p229)とされた。

萩原朔太郎や河東碧梧桐などの文人墨客にも愛され、松本清張の小説『不安な演奏』にも当館とおぼしきホテルが登場する。田山花袋は『温泉めぐり』の中で、「鯨波の海水浴としての設備はかなりにすぐれてゐる。蒼海ホテル—停車場からすぐ上って行くところにあるその旅舎などは、夏は殆ど客で一杯になるほどである。私はそこに冬の寒い頃に一夜行って泊った。…蒲原平野にも温泉の分布は二三あった。勿論大したものではない。大抵はわかし湯である…共に多くは言ふに足らない小温泉場である」⁴⁷⁾と記している。田山花袋は信州を訪問した後、越後へ向かい、「六日鯨波(蒼海ホテル)」⁴⁸⁾に宿泊したと日記に書いている。

6年蒼海ホテル側の高台に「谷干城詩碑」が建てられた。11年11月発行の『新潟県温泉協会 会報』所収の会員名簿に「鯨波鉱泉 刈羽郡鯨波村 旅館蒼海ホテル 山岸誠次郎」(会報、p161)が収録されている。

株式会社蒼海ホテル(鯨波2丁目)が経営するこのホテルは明治、大正の面影を残す由緒深い旅館として親しまれた。しかし新設ホテルとの競争、新潟中越地震での被災も加わって、老朽化などを理由に平成16年3月100年余の長い歴史を誇るこの老舗旅館は多くの馴染み客に惜しまれつつ廃業した。現地を訪れると、ごく一部残るホテルの廃墟が夏草の茂みに半ば埋もれている。(柏崎市の2鉱泉旅館の項目はソフィアセンター(柏崎市立図書館)編集・発行『ソフィアだより』に長期連載された「柏崎の水」シリーズ各号(平成19年3月1日、平成20年7月1日号ほか)を参考とし、かつ執筆者小林俊夫氏より種々ご教示いただいたものである。)

Ⅶ. むすび(「小竹コレクション」)

「鳥瞰図」等の諸地図類から文字情報だけでは判明しない地理的情報を入手したが、さらに幸いにも沿線の柏崎市立図書館には小竹コレクションと呼ばれる一大絵葉書資料群が存在したため、今回は多数の文字情報と画像情報を得ることが出来た。最後にこれを紹介して結びとしたい。

収集したコレクターである小竹忠三郎(おだけ・ちゅうざぶろう 柏崎市柳橋)は慶応2(1866)年縮問屋の藤三郎の四男に生まれ、西山油田の噴出による石油ブームで家業を廃業、明治27年有志と柏崎宝栄株式会社を創設した。幼少期から美術に関心が深かったため、各地の石油会社に出張する際に「全国各地の名所旧蹟・町並風景、並びに商工業・美人画を含む絵はがきの収集」⁴⁹⁾を開始して、30余年で10万枚以上を蒐集し、専用の整理棚に収用、目録『全国町村別名所絵葉書及名蹟物産総覧』を作成・刊行した。しかし念願の『目で見える地誌』の完成を見ずに、病に倒れ、昭和10年死亡した。享年68。郷土・新潟県に關係する絵はがきが「小竹コレクション」として柏崎市立図書館に寄贈された⁵⁰⁾。本稿では同コレクションの絵葉書を同館の許可を得て使用させて頂いた。大規模な蒐集を可能とした中越の石油の富が惜しみなく投じられた「小竹コレクション」は貴重な観光資料として教育・研究に役立つことにより、

旧所蔵者の名前は永遠に残ることを故小竹忠三郎翁にも報告したい。

今回の旧越後鉄道沿線紀行は明治中期に俄かに巻き起った石油ブームに起因する石油の富が生み出した料亭・旅館・鉱泉・海水浴場等の観光ブームの痕跡を、これまた「小竹コレクション」という石油の富の一変形で辿るものであったと結果的に総括できよう。規模の差は別としてオイル・マネーによるドバイのリゾート・バブルのごとき現象が、果たして日本にも存在したのか、やはり一時の徒花であったのかどうか…など今後の精査を要する課題も多く残された。

吉田の大地主・今井家の邸宅・旧銀行建物などは子孫のご努力で今なお当時の偉容を誇り、道行く者に深い感銘を与えている。その一方で、沿線の景勝地・寺泊は長鉄の佐渡への見果てぬ夢と戦前黄金期のドル箱・共楽園が存在した因縁の地であったが、今訪れてみると駅舎も大浴場も跡形もなく消え失せ、あたりには一面の夏草のみが繁茂する、まさに夢の跡であった。また柏崎の二つの鉱泉宿も現状はほぼ同様であった。これにひきかえ悲劇の経営者・久須美東馬の場合は弥彦公園・弥彦駅舎・銅像・伝記等が現地に残され、彼の偉業を偲ぶ縁（よすが）ともなっているの、以て瞑すべしであろう。

注

- (1) 越後鉄道の沿線案内記である『越後鉄道訂正七版』には「越後鉄道唱歌」も収録されている。訂正七版について久須美東馬自身は「この書、片々たる小冊子に過ぎざるも、沿線の勝区、史蹟、名産等略は羅致す。今や版を重ねること七、体裁内容を補訂し、新装して上梓これを公にす。わが越後鉄道乗用者の案内記となり、天下煙霞の癖を有する、風流飄客の伴侶たるを得ば倖也」（越後、序）と記している。たとえば訂正七版には沿線の鉱泉として、緒立（寺尾）、岩室霊雁泉、猿ヶ馬場、本与板の鹹泉、御山（石地）等のほとんど無名の鉱泉を紹介しているが、これ以降も沿線での石油採掘等に随伴して新たに鉱泉が開発された。
- (2) 案内・地誌類（発行順）／石油…門馬豊次『北越石油業発達史』鉱報社、明治35年4月、婦人…関甲子次郎『越後の婦人』明治35年5月、北越…北越鉄道営業課編（土屋金次）『北越鉄道案内』北越鉄道、明治36年10月、実業…小山岩五郎『越後之実業 第一編刈羽郡附名士之風半』柏崎日報社、明治41年7月、華街…小田金平編『柏崎華街志』明治42年、旅友…瀬木忠次郎編『上野新潟全線各駅旅の友』旅の友発行社、明治45年2月、案内…『越後鉄道案内』越後鉄道、大正元年、沿革…『越後鉄道沿革』越後鉄道、大正2年5月、地価…『新潟県刈羽郡地価持一覧』実業介立所、大正3年7月、名士…三井田源七編『刈羽郡と名士 附商工業者人名録』実業介立所発行、柏崎日報社印刷、大正3年12月、案内…『越後鉄道案内』越後鉄道、大正7年1月28日発行、新潟新聞社印刷、図絵…吉田初三郎筆、長郷有泰（越後鉄道営業部長）編『越後鉄道沿線名所図絵』越後鉄道株式会社、大正10年4月8日発行、大正名所図絵社印刷、越後…長郷有泰編『越後鉄道 訂正七版』越後鉄道、大正12年8月31日、新泉…池田信吾編『新潟県の温泉』新潟県温泉協会、昭和8年、会報…『会報』新潟県温泉協会、第4号、昭和11年11月、遺徳…久住元昭『久須美父子の遺徳を偲ぶ』久須美父子遺徳顕彰会、昭和34年、安田…『安田保善社とその関係事業史』安田不動産、昭和49年、北銀…『北越銀行創業百年史』北越銀行、昭和55年、越交…『越後交通社史』越後交通、昭和60年、年表…村田徳雄『年表 高柳町昭和史』昭和62年、寺泊…『寺泊町史 通史編下巻』寺泊町、平成4年、町史…『吉田町史 通史編』吉田町、平成16年、／新聞雑誌／東日…東京日日新聞、読売…読売新聞、D…ダイヤモンド／会社録／要…『銀行会社要録』東京興信所、日韓…『日韓商工人名録』実業興信所、明治41年7月、商工…小山岩五郎編『信越商工便覧』明治44年、要録…人事興信所編『旅館要録』明治44年7月、人…『人事興信録 第五版』人事興信所、大正7年、名簿…全国同盟旅館協会編『全国旅館名簿』神田屋商店出版部、大正15年、衆…『大衆人事録 第三版』帝国人事通信社、昭和5年、名鑑…『全国都市名勝温泉旅館名鑑』日本遊覧旅行社、昭和5年8月、株投…『株式投資年鑑』昭和9年下版、人物…『明治大正史』人物篇、第14巻、実業之世界社、昭和5年、／類出史料／日銀…「久須美東馬蹉跎ノ事情並ニ越鉄清算状況」「越鉄事件ニ関スル件」日本銀行新潟支店長、昭和4年11月、『昭和四年度 重要回覧』審査部（日本銀行アーカイブ #340）
- (3) 白土貞夫『絵葉書に見る懐かしの鉄道』ほおずき書籍、2003年、巻頭。本稿における「小竹コレクション」と同様に筆者も研究上白土氏の絵葉書コレクションの存在に何度もお世話になった。
- (4) 『財界二十五年史』帝国興信所、大正15年、p418。日英醸造はカナダブクトリアにあるカスケードビールの製法を採用して、横浜工場（横浜市鶴見区3万坪）で麦酒を生産したが、震災で被害を受け、経営難のため、債権者の興銀から競売に付された。昭和3年11月寿屋が競落、昭和4年新カスケードビールを製造発売した。「日英醸造…会社が破綻して、株式会社寿屋が代って経営にあたるようになったばかり」（『麒麟麦酒株式会社五十年史』昭和32年、p99）で、1本3銭安く売り出したが、「安ものビール」のイメージで失敗した。オラガビールと名前をかえた末に売却を余儀なくされたいわくつきの失敗ビール。
- (5) 清水啓次郎『私鉄物語』春秋社、昭和5年、p309～310
- (6) 『日本国有鉄道百年史 第9巻』昭和47年、p624
- (7) 秋山高三郎「弁論要旨」小斎甚治郎編『五私鉄疑獄事件弁論集』酒井書店、昭和10年、p1340
- (8) 『事業家人名辞典』明治44年、イp79
- (9) 『信濃川補修工事概要』内務省新潟土木出張所、p1
- (10) 昭和2年12月1日北越新報（越交、p163所収）
- (11) 時事新報社第三回調査全国五拾万円以上資産家

- (12) 『大日本実業家名鑑』大正8年、地方 p15
- (13) 中野信吾は「石油王」中野貫一の嗣子で中野財閥当中の中野忠太郎の実弟。持株会社たる中野興業（金津村、資本金2,500万円、石油採掘・証券投資）、栃尾鉄道、新潟臨港各取締役、石油共同販売所専務ほか多数
- (14)(18) 鉄道省『温泉案内』昭和2年、博文館、p425
- (15)(17) 『日本温泉案内 西部篇』講談社、昭和5年、p24～5
- (16) 朝日新聞新潟支社編『越後の湯』、青冬社、昭和63年、白石秀一著『新潟県における温泉開発の歴史』などによる。
- (19) 「九月十七日…大塩技師と汽車で寺泊に行き共楽園に泊る。秋は淋しき日本海の浜辺。芸者を呼ぶ。この日来た二人の芸者のうちの一人が丸子だった。十一月四日、ひとりで寺泊に行き共楽園に泊り芸者丸子を呼ぶ。十一月五日、夜再び丸子を呼ぶ」（峯崎淳「宮本武之輔の謎」、『建設業界』社団法人日本土木工業協会、51巻4号、平成14年4月、p34）
- (20) 『信越及羽越線佐渡地方』JTB、昭和11年11月、p36
- (21) 『信越及羽越線佐渡地方 四版』JTB、昭和16年1月、p33
- (22) 日本温泉協会編『日本温泉大観』昭和16年、p1218
- (23) 荻昌弘『歴史はグルメ』中央公論社、昭和58年、p119
- (24) 森鷗外「北游日乗」『鷗外選集』第21巻日記、岩波書店、昭和55年、p9所収、
- (25) 『柏崎市史 資料集 近現代3上』昭和60年、p53所収
- (26)(27)(28) 安川里香子『森鷗外「北游日乗」の足跡と漢詩』審美社、平成11年、p131
- (29) 『帝国旅館全集』大正2年、p129
- (30) 東京支店たる旅館岩戸屋（神田区蠟燭町13）は昭和5年時点で客室数31、客室畳数220、宿泊料4～8円、館主は中野徹吉（名鑑、p4）
- (31) 阿部平右衛門（柏崎町）は鮮魚商兼阿部楼主（日韓下、p51）で30年代に納屋町倉庫脇に海水浴場（商工、p77）・「海月と云ふ料理を兼ねたる旅館を新築」（華街、p3）、柏崎鮮魚組理事長（日韓下、p48）、柏崎芸妓組合代表者（地価、付録p5）で地主、地価1,341円（地価、p1）、大正3年6月調の営業国税納税者（地価、付録p1）
- (32) 天京本店の経営者は市川京兵衛（日韓下、p51）、「御旅館 親切丁寧 確實勉強 柏崎停車場前 天京 電話長一三二番」（地価、巻末広告、65コマ）、昭和5年では経営者は「市川達吉、電話柏崎一三二」（名鑑、p292）であった。また天屋は明治31年では「旅人宿・天屋、市川久兵衛、所得税…、営業税12円94銭8厘」（『日本全国商工人名録』明治31年、とp47）、「御旅館 御料理 海水浴場 玉突場設備 北海一の勝境地 柏崎納屋町 天屋旅館 電話長百三十六番」（地価、巻末広告、69コマ）、昭和5年では経営者は「市川秀次、電話柏崎長一三六」（名鑑、p292）であった。
- (33) 『旅程と費用概算』ジャパン・ツーリスト・ビューロー、14年、p397
- (34) 「柏崎の水」42 西本町八坂館の鉦泉、『ソフィアだより』145号、柏崎市立図書館、平成20年7月1日
- (35) 中野平左衛門の本邸は枇杷島村字枇杷嶋（名簿、クp14）、枇杷島村の地主、地価1,760円（地価、p9）、営業国税納税者（地価、付録p8）、岩戸屋七代目、「鯛の子塩辛」を開発、岩戸屋だけの珍味としたとされ、平左衛門の末娘タイさんの記憶では「幼かった大正時分、父親が鯛や鯖の卵を（夏を越させて）長期塩蔵し、それを手で切りほぐして麴などをまぜ、この宿だけの珍味として客室に供していた」（前掲『歴史はグルメ』、p119）という。なお110人もの先人の事蹟が豊富な資料とともに展示された「柏崎ふるさと人物館」は同種の施設として類を見ない充実度であり、本稿でも大変参考となった。ぜひ中野とタウトの縁の展示もご検討賜りたい。
- (36) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳『日本美の再発見』岩波新書39、昭和32年（増補改訂版）、p66
- (37) ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳『日本美の再発見』岩波新書39、昭和14年（初版）、p52～53
- (38)(41) 『柏崎市史 下巻』平成2年、p856～857
- (39) 牧口義矩（荒浜村）は柏崎銀行頭取、北溟酒造社長（日韓下、p47、84）、地価3,802円の村一番の大地主（地価、p92）、牧口与一（荒浜村、柏崎銀行支配人）地価589円、牧口熊太郎（荒浜村）も営業国税納税者（地価、付録、p15）であり、廻船業で財をなした牧口庄三郎とその一族は柏崎銀行、柏崎貯金銀行、宝田石油等、柏崎の企業に登場する資産家。
- (40) 若松屋の経営者・佐藤三右衛門（鯨波村字鯨波）は地主・地価652円（地価、p8）、営業国税納税者（地価、付録p9）
- (42)(44) 「柏崎の水」31 鯨波鉦泉『ソフィアだより』129号、柏崎市立図書館、平成19年3月1日、p1
- (43) 萩原朔太郎『月に吠える』感情詩社、大正6年2月、p140～141
- (45) 『柏崎附近名勝案内』小竹天瑞堂、昭和3年7月
- (46) 『柏崎市史 下巻』平成2年、p859
- (47) 田山花袋『温泉めぐり』大正15年、p288
- (48) 田山花袋『定本花袋全集』第29巻、平成7年、p9
- (49)(50) 「全国絵はがき収集から地誌の夢」柏崎ふるさと人物館の常設展示資料